

NiMoGa 感動賞

『父』

もる

モルタル外壁の塗装業社に勤めていた父は、真面目で一直線で決して妥協を許さず、少々激しすぎるほど外壁塗装の仕事を愛し、生涯誇りを持ち続けていたと娘の私は断言できる。なぜなら塗装に関する知識や情熱は私が幼稚園の頃から、当たり前のように刷り込まれていたからだ。幼稚園のころは、祖母に読んでもらった「3匹のこぶた」の話が大好きで、父に「レンガの家は強いね」と言うと「レンガの家をさらに強くするには？」と真剣な顔で問題を出された。答えは「レンガ同士をくっつけるのに、モルタルを接着剤として使うと良い」とのこと。「お父さんだったら、こぶたが一生安全に住めるモルタル壁を作れるぞ」と自慢げに言う父を、幼い私は素直に「お父さんかっこいい」と興奮して見ていた。

ただ、ヘンゼルとグレーテルの「お菓子の家」の話を父にしたときに父が「お菓子でできた壁よりも、モルタルの壁の方がずっといいぞ」と言ってきたときは、怒りながら反抗した。「絶対にお菓子の壁が良い。そもそもモルタルってただの壁でしょ」。すると父は「ただの壁だと？今すぐ訂正しろ。モルタルの良さは職人によってそれぞれ風合いが変わるところだ。オシャレな家というものは、職人の息吹が感じられる家を言うんだぞ。モルタルの壁はその一枚一枚の壁に職人の息吹と情熱が込められているんだ」と怒り口調。幼い子供に熱く語る父は、大人げない気もするが、今思うとそれだけ真剣になれる職業につけることはちょっとうらやましい。

小学生のときは夏休みの宿題で、モルタルを使って家の形をした貯金箱を作った、というか、ほぼ父が作った。どう見ても小学生が作ったとは思えない艶やかな青の壁が目にはひく美しいデザインの貯金箱に、クラスの人から「作ってもらっただろ」と非難をあげたが、あまりにも美しかったため、私も「そうだよ、父さんスゴイだろ」と鼻高々に自慢したのを覚えている。

さらには、「壁に耳あり障子に目あり」ということわざを調べる宿題が出たとき、父は「お前も壁に耳をつけろ」と言った。「壁は手触りも大事だが、手以外の部分で触れると壁のまた違った良さが分かるんだ」と。確かに手で触るとボコボコしていたのが耳で触ると意外と気持ちよくて「新しい発見だろ」と父は嬉しそうだった。

少々恥ずかしかったことは、父と東京の美術館に行ったとき、父が絵画よりも美術館の外壁に感動していたこと。「さすが都会」と父は感動していたため、絵画を見に行っただけ

が私も壁の方が印象に残ってしまった。

そんなわけで家族旅行の写真も壁の前が多い。有名な史跡、建築物、寺社、銅像、よりもまずは壁。父が「いいね、この壁の色合い、表面の質感、そしてこのひび割れも年月を感じさせて味がある」と嬉しそうに言うのを、母も姉もポカンとして聞いていたが、私はそんな父を見ているのが実は嫌ではなかった。

父と壁との思い出はそこで一時終了となる。なぜなら、反抗期が長く多少やさぐれていた私はほとんど父と日常会話すらしてこなかったから。目が合っても無視。高校卒業とともに家も出た。就職したら「仕事が忙しいから」の一言でほとんど帰らなかった。

そんな私が30歳を目前にして大きな壁にぶち当たる。会社の都合で大幅なリストラが行われ私ももれなく対象となったのだ。仕事はなくなったが、正直すぐに仕事先なんて見つかると思っていた。だから前途洋々な気持ちでハローワークに行ったほどだ。ただ、何度もハローワークに通い、良さそうな職を見つけては面接をしてもらうなかで初めて、現実には厳しいことを学んだ。全て落とされたのだ。少なくとも30以上の会社と面接をした。全て落ちた。落とされれば落とされるほど自信がなくなった。一つ落ちると一つ自分の存在価値が下がったように感じた。次第にハローワークに通うのも嫌になった。

精神的にも金銭的にも余裕がなくなった私は、親を頼るしかなくなった。恥ずかしくて「仕事辞めさせられた」とは言えない。「どうした？」と聞く母に私は「今ちょっとね、乗り越えなくちゃいけない大きな壁があるんだよね」とだけ言った。母は心配そうに「ちゃんと言いなさい」と言う。するとそれを聞いていた父がゆっくりとこう言ったのだ。「壁は乗り越えなくていい。まずはじっくりと壁を眺めなさい。壁に触れなさい。どんな色？どんな素材？模様は？厚さは？感触は？いろんな角度からじっくり眺めたら、乗り越えるのではなく、優しくノックしなさい。自分が壁だと思っていたことが実は自分を大きく成長させる次への扉となっているから。壁は乗り越えるものではなくて私たちを守ってくれるものだからね」と。

あのとき私は父の「壁は乗り越えなくていい」という言葉に救われた。父は一度も私の現状を深く聞くことはしなかったし、「頑張れ」と叱咤激励もしなかった。ただ穏やかに「壁は守ってくれる」と言った。おかげで私は今自分の目の前にある壁をしっかりと眺め、何が課題で自分のどこを改善すべきなのか冷静に向き合うことができた。そして優しくノックすると、父の言っていた通り壁は自ら次の新しい世界へと導いてくれた。私は無事に新しい職場と出会うことができたのだ。

あれから2年後、父は癌で天国へ行ってしまった。そして相変わらず私の行く道は平坦な道ばかりではない。目の前に壁はいくつもある。ただ、それらの壁を今の私は愛おしく感じる。自分を成長させてくれる大切な壁だ。私はその壁をじっくりと眺めじっくりと触る。するといつも新しい発見があり、父の「壁は守ってくれる」が心の奥にこだまする。

先日3歳の娘に、「ヘンゼルとグレーテル」の絵本を読んだ。思わず「壁はお菓子じゃなくてモルタルが良いよ」と言うと娘は「モルタル？」と不思議そうな顔をする。ただ、父が真剣な顔で「その通り」と言っている声が、確かに聞こえた。